

1B-31) Subtemporal transtentorial approach にて摘出した脳幹部海綿状血管腫の1例

青木 広市・中川 忠 (新潟県厚生連中央
倉島 昭彦・山崎 英俊 (総合病院脳神経外科)

頭蓋内 cavernous angioma は比較的稀な疾患と考えられてきたが、近年画像診断法の進歩に伴い発見が容易になったことから脳幹出血の原因として、この疾患を経験することは少なくない。そして、この疾患の手術機会は増えており、その臨床像からみて、適応の決定と手術に際しては慎重な態度が求められている。今回、私共が経験した症例をビデオで供覧する。症例、49才男。入院1カ月前より頭痛、複視、左上眼窩部のシビレを訴え、その後、突然歩行障害、右片マヒが出現した。入院時、軽度意識障害、眼球運動障害、眼振、右側運動不全麻痺、失調などを認む。CT、MRI で橋出血と診断し、保存的に治療し症状は徐々に改善した。しかし、MRI 上で橋上部の左腹外側に cavernous angioma の所見が残存し、1カ月後に手術で摘出した。術後経過は良好で、2カ月後職場に復帰した。脳幹部の cavernous angioma は比較的軽微な神経症状で発症することが多く、手術に際しては適応の決定、手術法の選択を慎重に行い、後遺症状を決して残さないことを肝に銘ずべきである。

2A-1) 脳室内出血で発症し片側性病変から両側性病変への移行を観察し得た小児 Moyamoya 病の1例

妻沼 到・大倉 良夫 (水戸済生会総合病院
早野 信也 (脳神経外科)
小池 哲雄 (新潟大学脳神経外科)

症例は6才男児。てんかん・脳血管障害を思わせるエピソードなし。一卵性双生児の兄がいるが、病歴・CT 所見に特記すべき事なし。平成元年7月20日頭痛・嘔吐で急性発症。傾眠傾向・項部硬直の他神経学的に異常所見なく、血清抗核抗体・抗 DNA 抗体・抗 Sm 抗体・血清補体価はいずれも正常。CT で左側脳室体部を中心とする脳室内出血を認め、造影剤投与により左中大脳動脈 M₁ 部がやや毛羽立って増強された。脳血管撮影では左側 carotid fork 特に中大脳動脈起始部が高度に狭窄し、脳底部に軽度の moyamoya 血管を形成していたが、右内頸動脈領域には狭窄性病変及び異常血管網は認められず、類 moyamoya 病と考えられた。発症から5カ月後に脳血管撮影を再検したところ、新たに右中大脳動脈 M₁ 部に約50%の狭窄が生じていたため、片側性病変から両側性病変に進展、即ち moyamoya 病と診断

し、平成2年1月11日再出血予防を目的に左側 STA-MCA anastomosis 及び EMS を施行。術後は何ら障害を残さずに退院し、元気に外来通院中である。

2A-2) 若年者の脳梗塞の検討

山本 潔・川上 敬三 (秋田赤十字病院
増田 浩・熊谷 孝 (脳神経外科)
広田 紘一・山田 茂 (同 神経内科)
高橋 薫 (同 内科)

Moyamoya 病、Takayasu 病を除く、40歳以下の脳梗塞13例を CT より穿通枝領域7例および皮質枝領域6例の2群に分類し、脳血管写所見、risk factor につき検討した。これらの症例では高血圧、不整脈は認められなかった。穿通枝梗塞7例中4例では、脳血管写上の血管病変、有為な risk factor を認めず、特発性若年性脳梗塞と考えられ、うち1例では aPTT の延長を示し、Lupus anticoagulant が陽性であった。特発性の症例では入念な凝固系の検索が必要と思われた。(1例は現在検索中)皮質枝梗塞6例中5例および動脈硬化性変化を認めた穿通枝梗塞1例で脂質代謝異常が認められ、若年で発症する皮質枝梗塞の risk factor として重要と考えられた。また、悪性腫瘍の経過中に脳梗塞をきたした症例が2例認められ、かかる症例では血管内凝固活性が高いことが指摘されており、原疾患が脳梗塞の発症機転に関与したものと考えられた。

2A-3) 前大脳動脈に3個の動脈瘤を合併した 中大脳動脈閉塞症の1例

江面 正幸・香川 茂樹 (白河厚生総合病院
脳神経外科)

無症候性に経過した中大脳動脈閉塞症に、同側前大脳動脈末梢部に3個の動脈瘤を合併した症例を経験した。症例は67歳女性、意識消失、右片麻痺にて発症、当科に搬送された。CT では異常所見を認めず、直ちに脳血管撮影を施行した。左内頸動脈撮影では、明らかな閉塞血管や狭窄部位は認めなかった。右内頸動脈撮影では右中大脳動脈の起始部での閉塞を認めたが、その支配領域は右前大脳動脈からの leptomeningeal anastomosis により還流されていた。また右前大脳動脈には、前内側前頭動脈との分岐部および脳梁辺縁動脈との分岐部の2カ所に動脈瘤を認めた。右片麻痺は翌日には寛解し TIA 発作と考えられた。発症より20日後に脳動脈瘤根治術を施行したところ、これら2個の動脈瘤のほか前頭極動脈との分岐部にも動脈瘤を認めたため、計3個の動脈瘤に